



吉来叢句集

中村俊定文庫
文庫 18
494
1



句評の一をしよりてかゝる乃よりしに習ひ
侍りし者なりこれに孔蕉翁一人のあより
出たりくそ孔句評のかさういふらんや世々の
十大弟子孔子孫十哲のそくひきだすれど
そ孔門人多くの中にも闕弟子其角嵐電
といひ又西子去来丈系と云難弟難兄
上足りれり其角嵐電と孔雅と孔あらし
業にいひし者名利孔境に遊へたすそ孔流人を
汲む少くも多くて其角子五元集嵐電と云
峰集をいつる家の集ありて世よりよきは

去来丈系を蕉翁孔直指孔むのあらし
孔雅の名利と云くいつひてきく拈舞微
笑孔ころをよく傳て一糸の傳書と著し
一人孔門人哉をめしんて中してそ孔叢句と云
集へき人もれこれ孔真と云ふと蕉翁乃
孔雅の尊體と云へん事と云ころ此二人の孔
雅を志すひきく暖味也專の花に遊ひて
と指しちりき嵐電と云して高掃舎と
むくをさうり栗津の浦孔秋の月ひらいてを
秋の也や孔叢と云てそ孔叢のよきん

家とちんくうしよすし愛子思ひ出さず
書らうやう叢句を久しく名譽に底の
かくし置しをこけお海峽城の重厚築津
北雪江の二法師寫んことをあつちん
こひりて免ぬるよ足色しむらやむや寔の
あへ出していつつよ古人に子背く子
ちんれ

明和の年卯のまこ月東山に居る北里

五外菴より
蝶夢記

去来姓を向井名を承以郎名承焉と把
前出崎北人あり彼地の聖也糸酒乃
氏族よしく世に儒を業とす博く書を
す文唐學をまき多し詩歌を愛ふり沈
厚より多し格格を判り都よりあり多し何
れ北殿下子仕へ来る宦袴の映りて芭
蕉の歌に隨ひて詠詔の風雅とす鴨川
北東野渡院村に住りて、嵯峨北小倉山の
麓に別荘をいりて行通ふある秋のころ
庭より柿の熟しとてんすそ北居を落柿舎と

名づく菊亭内府よりそ此三字を賜ふ
實承元年の秋九月十日没年暮る東
山真女すあり今此所掃金を収和了
ころ重厚再興して今存せり



吉本後白集

春

えのや高下橋り此た刀常人
えのや土つふし流 新しきま
藪形ても違ふふても花のま
高人の言言ゆらる伊勢のま
蓬葉子りけてかさふや夫の袖
菊葉やたねよりして松乃庵



月夜秋のめしきさし門の松
獨り寝もよまぬそ人初子秋日
わら葉つとまらねむらうさん徒

巖峰まてある曙小

青や従ふ丹皮の麻は降るとて
鶯は啼や餌はらふにまもも
うくひま乃音つちちちぬ二三白
鶯や内のも啼え地うさ葉は
黄冬はちくくそこに樂有うま
うくひすの影はまけ音や谷の夜

青や雀よかり 枝うつ葉

黄鶯はすの啼やひうと影の音
風おろ青は葉をえんと舟よ
空て出らるに

うくひすう人の出州う梅う詩
夜をていまうさく梅はねりひう丸
上翁の山花よましくら家子
修し侍りて

秋の青や山路分入る大のち
高瀬や海より 暮てく多は花

五ふをよりて志はゆく 柳の南
應して人もきこせりやまきぬ
ま柳のきこゆる遊ふ板戸の糸
始乃きこゆる人も柳の紐
ふたしきや 園のうけくの臘月
鉢きくまきぬ夜とるれと籠るり
ほより紙文の返した
扱自一きつて千やんら那
丹島町取つて師のきこ
あそとるや州中うあがり 扱自

あそとるや州中うあがり 扱自
うま友よのちれ多猫能きやうき
川原や二尺おれとむ猫のこひ
いくきへりきや岸能陸の南
田能町や紅き背負とるき陸
一時きまきぬ 啼やむ陸の那
流つちもひしけと雛子のわろくぬ
籠乃木くしきく人きぬ雛
帰るとてあつち雁よ海のとる
遊ふとも行ともきぬ蒸の紐

山雀の言も音もあつても別れ
振舞や下座も直る古縁能誰
より帆の淡路もあはれ舟干水
うこくとも又くす細うの男の南
陽巻やまゆりなつく度り駕
神鳴や一むら雨の走りく
まぬに吹出されたり水舟は昔

名丸追悼

踏まやき 愛も名残や空遠の竹

丈このと哭や

凡十年出笑も三年の恨も化し
そは恨も百年乃此を生か借
とても形名跡おしく此一句と
身向て来しこころ行ま書を語り
傳るの

古来名ぶく事やと也此生別
花もさつりあはれよとまあも丸
西行の詞をうりて頼政此詠を
詠を練きも人をあはれこころ丸
使も来り馬も新ねぬ

竹籜も折るこそよれ初さゆ
花さや白ま路をつま令せ
知る人よあはしくと花見は
何さうそ花名も人乃長刀
咲く花よりき世は人や神さ
ふし聖山さのちう方よ茶めり
小袖もま居ちのうしや急の花
一花も何れ山ころつ花さの里
花見もさせぬ里の犬はさ

湖上花

花よ今眼入りり志賀の浦
ま枯の跡り多はよ花の中
因上花危へ花見よさふて
海も見る目つきも出さ急花
山深く分入りて
木のうろ花天物も今も花の互
南都の般若寺も
あさり花や般若乃何れ
教錢も用迄新ちり森の花
花愛とちうまや跡の向花山

於此より芳好ふしや夕梅
一むしうちやむしや赤梅
子一と以ゆき此のこや瀧崎山

雨居

山麓此のゆきを 机の南

穀の根やあけてゆり出さるる
く姓もまゝよりつく茶摘み

翁此方より臨ひし時。年の

喜義仲寺へ詣り

石塔もたや苔つゝや春此雨

三月のあま書のも名鉄う乳

集ま此形を納めんを

神風此法生もぬし門の仲

夏

勢のあぐや中麓と十文字

うふ出と山へまゝるる 規

先牙、影足合まやわきま

いさなり代友版や時鳥

吉世にて逢きしあはれなきを
横中のるや山出し北郭に
係りてまはるる心一きりぬるを
うらみきもや、文太刀や、町を
ぬらふの空、筆ひかひひき

西山へまはるる

新はしよや内也、子規

鶯のあはれとふ所あり

新喜もよびて

あはれ身もあはれしよや郭に

伊勢まで

お花は海のおたりや新橋止
うのゑは絶るきうへつ言の所

巡禮のころ

卯乃花は菟沼多し、和頼止
光りあはれニつ山乃、後り、あ
色し、の他とちりり、まはあ、と
つ、あはれ、お花、け、ま、あ、知
おく、の、葉、お、ま、あ、ま、あ、と
舟、お、北、一、濱、あ、ま、あ、と、お、花

熊野路より来る人もちぬ相の花
え祿七十年久しく絶つりり
宗行れを解し
碇小築くゆる白らきの事
竹の子や島 儂々 惣太郎
表士女子の生母をいふて
第お村より来るし 方お外
湖の水 中さりり 五月西
きおしくに 之月おむ 五月
大和紀伊の境とてきく 飯とて

は来の順禮をもとめんとす
りれと料号つとく 舟おえし
つうもてとてきく 飯とて
きこりお峠まで

五月の末に沈むや紀伊の舟
曲水子に寄るとわて 堀田の虫
見よ中より舟子夕への経流に
つきて下りぬと 語れと 舟を
さし下りて

大いふ火や 黒津に 猪見の崎

螢火や吹とて入て鳴け聞

妹の子身やうり家子

女は上より出しく清くかゝる
水札亭や龜沼くさる岩に上
鷲とてらくく村々水鶏や
石塔子や磯谷入るや洞の鮎
尺物の女とてらくかゝる出た
猿窟して多まろまふ致せり
木津へ中よりて

山里に較とて益平の答ひ

其角に母乃悼

致せりとて善たく悔ふ
多末を致せりも鮎や二形大系
谷汲寺にて

順禮も志事や徳と 鮎に飯
すしはや深淵に上乃とてく
立あうく人なすまれて涼
涼しき夕立の入り口
所をしも糸と山より夕暮
更なると 徳とて不 物涼心

猫の子乃中着る物もまゝくまゝ

紀伊の藤代は通るは此所

之郎重家此末今もあつとす

ゆれたるの傍りに門葉地押廻

何馬もいふまゝに矢根根主

いし紀武士ちりまの庭にいし

弓掛ねとて古木今もあり

藤くはやくいしき所はまゝ

海東生女もそ善走さぬ末

まゝしとも世止しうは念佛

ゆまゝに衣帯起し多帰る

まゝくくに在れは涼しき夕

暮乃二葉よゝくも暑

石も木も船に老多暑

夏濃の玉態坂人見此

又もあつく明や人見乃

假らへよ人見の松の縁

同じ園

交うけて葉葉くまゝ暑

葉うられさくけ出で瓜の

吾も川や森のひらへ此處の上領
夕ふれ也 元きくひく侍重此の心

伏見の舟中より都の方を急いで
夕立乃雲よりうらまを雨又の電

六玉川此記あり

六玉川言明、余も清水の地
羅着を 疲よめさく人土用子
水多丹此中のみ入し竹生時

此是乃此紫より上りる子

むくし魚へ一ッ 畑此ゆり其子

夕影や名とあしと花此形

酒きう難皮子屋を移せし向

門賣も其自由なり其はうふ

秋

積ちふこや初秋此日暮く此

うちもくく釣のうらや其此河

酒造とあくて酒のも是玉の

筑前の黒崎よりゆりて出逢の

多くとし沖に出て雨と水踊り
侍るといふを呼ぶ

七夕をよけてお多々の舟踊

昔々ときと遠くで漁父は書始の
子こふふと七月七日のふゆを侍りし

黒崎砂明多て

くちつけよ星す川影も浦北智

魯可々許す事

山本や馬入り末内をむ之

鬼相の奥多つしや親の顔

書よおれと人私許すを

森道多乃くくやうき 鬼まら

あつと長崎お帰るるに

兄く人孫子と有りて是 義

踊子よ望き細乃 幸ぬ人

新形や秋を 摩北精集信

秋の日記かりそめさうしんく

初家や猪の似芝北起より

高唐と風こそはゆは末迄

悼風固

胡夕よふらふり此故袖の處

嵐蘭進傳

小貫此劍いかりり昔此處

遊女常盤身まのりるをいきて

相し進をいる人の子傳

處より此世の外此身夫に

芭蕉翁此奥乃西道を解

そ此書寫の奥に書付る

ゆれつ千つ猿やつもて袖此處

格書ののまぢせと行間夜小

長崎丸山

以るつ戸かと此傾城堂いり、枕

都えん 飯ましすりまぢいり

澗芽せやまうりま下ま 念のあ

又給おまや人んそむる山此傳

田上

山宗まで魚喰ふ上子早稻のめ

こけ極まかると抱つく西氏に

尻換り馬飛まらぬ花ま

ひことう山まで卯せり列る

君々も中しる末へし花き出
岩端や夏より月北宮
音より啞北かハヤ月又の音
名月也縁よりすなはちの音
名月十海もたより山も又は
月尺せん伏見の城北陸 舞
名月やむの心北辨庭照さし
余きいゝる字をせて月尺の心
是の心も過こむ縁乃月尺の素
龍くも東向く人月北の心

精

此處より少く方せぬ北の
縁端の心は他よりおぬしと休
息仕へられと

月北の心我里人乃 其素の心

世皮よりくさひきり日と北の心
忌縁より素に帰るとて

鴨川や月尺の心子川あり

長崎素行亭

浦人とあそびて海より月北の心

長崎より田上は旅席よりくさひ

名月やこの身にせまる旅くろ
園木は宿まで小娘はまきし海
くまを聞き

月うき子裾と深さようち秋
牛林の使物と送葉して

うけ夜は月も人まじり世あはれ
長崎諏訪の社まで前書あり

きとさき京てうけはも縁訪の月
十六夜やきしうきまきあはれ
約案の本巻や出らん三りの月

海山を免へて後此月尺のち

筆者手納

筆秋は白毛も神乃老く礼

一戸や名もやあらし弱むうへ

紫掛の帳とさやまきあはれ

娘より嫁よりよし記 碇り那

あま風やまき木の弓子弦とく

秋風子耳の垢とれまきし

吉備津言奉納

秋くせや鬼よりひしく吉備の山

以所のや小森よりる麻北角
小男麻や岩に踏ふる予のま
啼麻を推の木折るん尺付る
灰耳しやや子吹と麻北のこへ
れく山や玉有つく麻北有

伊都岐急まで

く川激乃岩不子まや麻の聲
浦陰や通しとあるわたり
新あしとま急の上は渡り
毛月折と米葉急よりうら

道安筑北廣崎と通り
人くくへれ急あつと
せれそのれる曉つ筑北
書る免侍る

ふふ聖と米急いそくしやう鳥
吾崎子控森のころ

ゆさ急も今きうり森と渡り
雁う子の急もきうり時折
筑前北玉急

福急や子賀もあつは子厚も急

同是時にて

上をきふてわす海遊女や鮫つり

先訪を何く北浦う訪ふ

八月や潮のさへきを山うつり

田家

聞かぬとふら葉山子乃腰刀

有磯海集撰詠ひきり時入句

とも書らつて色もあつてせきりに係て

後き

警北風や聖分ごぬとも有磯海

松茸や人よとくく 真北先

志て神職ふむりき人き真と

危も實も變移ごまし神の秋

疑波津ご

芦北種ご著るりや家の儀

言女亭ご先時北ごとも中

出らる席ふ

秋ご中月目ごつ菊の荅ごれ

葉候ご尾犯のかさりや山畑

筑前精あご

筆能書きのりて存てや瀨底

自題落拵舎

拵ぬしや指をちの身あはし山

落拵舎感偶

拵賞や又れとぬひさるる素素

芽立よりニ葉又志多拵の言と

土字とされしもの拵はまや省

人彼を拵舎ももろこおつし

屋うて安る拵拵お葉も存問の拵

長崎より支考子逢と京拵子

とて多つてられて

息方拵菫子問き人暖味の拵

木拵りふ急味とる拵木拵り

園坊子て

法山乃草葉白くや拵も嬉く

唐人拵拵とてあつて人拵

とれらるる

喉へとも中川也新々うり拵

氣拵説

面杖持をへつる栗拵氣も

續甲陽軍鑑

あゝ昔もまた此位徳の武士を中海に
屯き夜も寝 字似に存らん

聖徳院にて

櫻 此木の色もさあや秋此堂
うき人とをささけ 徳とんあまのれ

冬

あゝ此ぬもかいつくろひぬ 紅くは

あゝもけ此鳥帽子の上や初時を
板ととる 意も 意も 知くは
いそいそしや 沖此時雨乃 岩帆片帆
一村雨くたれて 明くは 辻行灯
こゝろし此地も 意も 意も 知くは
あゝもや 此小袖を 吹くは
あゝもも 先も 意も 意も 知くは
山麓の里に せむき 意も 意も 知くは
響物乃 上も 意も 意も 知くは
倉村も 意も 意も 意も 知くは

公相病弱ふと聞くと仕見より
有舟さし下す

舟子存と奇物共同や各籠
翁の存中

白鬚のあまうりきやぬゆり
翁病も一人前此火燧の南

馬腹中や火燧添やて舟此親
翁の存中祈禱此句

末のし乃空尺と直と和鶴のこ
傷亡師此季

やまぬゆぬ室も十夜此泪のち

未多の許より芭蕉翁乃せりく
とつりりあそぬされ各名廣ふ

偶居して心地さへまふす
翁あや茶湯の後此葉端と

翁のあや
翁あや人考つ人て暮す以下

翁と面忘る義仲さす
爰うつと度き袖此くれれ

りうりさあふ出り軽子禱

木曾墳子集りて

船馬子まゝ注し侍七神多内

抄本より

初更十四五里登りて比ら松嶽
應くといつと書くか電の門
せ免よきて香松つもるや小舟松嶽
香松山かりつと梅もさりりり
九寺よ見るれぬ電の原さうれ
孫やる翼のとりくや比ら乃香
松人乃好も通くさ香松松

松松中に居て見る雪の山松り南
雪空や鬼も孫を出来へく

神治化君

そ松村や香の夜ぬる舟逢の雪
暖藤七香の日はま孫籠町

軍書を讀て

香陣れと奉盤侍前松家惜
ひつりけてりや香吹の豊崎は座
松松よまるとの上さくきん少
志哉者と指やさく人玉おん

訪僧文系

馬道や蒼きとるんて雲は白
山畑や喜よのくしてあうち
長海又眉は毛長し冬籠
西七亭

案月や日おせよ志はく
空角一五一

旅をうと向るゝ系や冬籠

賀碓波山撰集

木うしや剣を物ふとま山

夕照よひつく碓波の冬籠
冬籠の木は向歌の冬籠
賽銭をたふして拂ふ前系
布子急て淋しき系や神送
荒儀やたしり別々
鴨ちくや弓矢を捨て十五
尾尻は心とあまし海氣
冬籠古き籠筆足也よ
物ころり門目立き鐘
冬籠冬也 冬籠冬也 冬籠冬也

十銭と授けてる所の紙と紙を
旅人の紙をうけし紙をうけ
楷の紙に親子をうけし紙をうけ
懐僧より

まき衣や馬のつり糸 山形上
堀川と通りて

有明子ふり白くまき衣さう
火のけ毛 背へさく意し寢の前

李下り妻は身中うけしに
在るまはやくさへ次ゆく北下し

空人よおひいといとく 親は紙
信弥 葉や火を替く南ちよ
之樂紙はいとまきし佛名
度暉

此は西 中の紙る也書岩山
陰凡子乃撰集を親ひ書る白
糸とせんといふにまむいふ
くくし紙葉をうけて 織出く
将らりと人の中々れをうけて
事あるといふは法し侍りて

子慶又一張亥や青むし
くれて祈年の中や伊勢總地
祈年小豆張張や尻の形
うき登張一平と何うとし
やしもとわ牛張尾かと張あよりか
神鳴もさいくや年の事張言

長崎張浦子張標して

年乃とくまてりや足張下
とし張夜の舞や綴やこの膳
年の新や人の子は張十七

追加

喜柳や慶のひ子ある未されと
十五夜の月此の柳前
日新くさ意もさちの月の善
牛妻て伯父と冬はくは

文政十二生音版之

防稿去

古友